



13  
2132  
39





39  
2132  
39

あ  
とら  
は  
ゆ  
は  
は  
は



香  
山  
山  
山

遊ユウ僊セン窟クツ烟エンは花ハナ題テイ言ゴン

祖ソ庭テイ事ジ苑エンまきのまきのの六む日にち今いま禿く林りん

正せい寢しんを以もつ方かた丈ぢょうと守まも蓋けし是こゝ耶や黎り城じやう

乃な維い摩ま誥ごの室むろふ則すなはと取ととと云いふ

るや外とほ山やま名な蓮れん流りゆうが建けん層そうは歎なげと歎なげ

し假かり宅たくの變かは化くわは感かんとくとく丈ぢょうか



齋藤

Red square seal impression.

66

116



記は作らるに擬て聊才文の刻  
 床千三萬二千はあらん連乃  
 座敷く澤名居士の仮宅五阿ま  
 とくを將瞿曇氏乃風喻の趣向  
 亦文成遊仙窟の夢物語有と々  
 勢む無とせん唯傍小口吹茶碗

ロム

を採芳原楊枝の大ぶさふ香根と  
 妙々わぐ真に志をうつておよと申々  
 止ぬ岩首く文月初旬假宅花  
 炮の物白首樓薄倖の隠士  
 墨水み林丸と浮かめとす  
 毫と測ぐ























変挺



けい 旋代桑でだんとうとつやア志り入し  
 女房 ハイ梅ト 梅 のふれをかす **変挺** 去もれ桑屋とらふ  
 そのもがせ天神どあまやふ **素えん** 部ど  
 すうのう 礎 す しくは梅がしをせんどの女らあど  
 ふくせきと虫 ガ ががづとらふあまやわらうせ  
 おうとまん モウ **変挺** 梅がしとらけ  
 けい サ 桑まんでのふれとらう ホウ けい サ 桑の  
 アやうぢとらう ア 桑屋とらう ア 桑屋とらう ア 桑屋とらう

女房



桑の根のからやきをとりけるの **素えん** ウ 素えん ウ 素えん  
 ふ ユウ 素えん ヒ 聯のうきとらう ユウ 素えん ユウ 素えん  
 こんごうの町よね奇の家を献 ユウ 素えん ユウ 素えん  
 桑とモ **変挺** ころへ消 ユウ 素えん ユウ 素えん  
 影 ユウ 素えん ユウ 素えん ユウ 素えん  
 史 ユウ 素えん ユウ 素えん ユウ 素えん  
 津 ユウ 素えん ユウ 素えん ユウ 素えん  
 けい ユウ 素えん ユウ 素えん ユウ 素えん







































初日ねえせの子ぎらひつちもやがれど川がふいに  
 うづまり園とよはた所と去ど郎やま廣まの者し正ま待ま町ち河か京き町ち今い土つ  
 免えん谷やおお中ちゆう一いつ人にんのちよとつま堀ほりのお送おくりりて  
 智ちのぬけううとまうり安やすふ雪ゆきの梅うめせのうう替かげげ  
 白梅はくばいささ子こののりりれれもも權けん高かう人にん引ひももちちぎぎううに  
 けけちちううくく南なんひひ仕しのの中ちゆうぎぎれれのの細こんんよよ今いもも世せ權けんよよ  
 つつるるせせううちちんん守しははのの鬼おに灯あきふふ似にららちちややららくく乃乃  
 清せい攪かんのの怪かいりりれれとと大だい乃乃廣くわうふふくく西せいのの春はるののななららまま

ころも圓まごころしつて門をへ今も権かき  
 ゆゆひひ床とこのの志し重ちゆうじじ不ふ画かくかかららののななむむくくししつつををらら  
 正せいをを免めんへへ下げままげげのの掙よりりもも長ながくく舌したをを出ですす  
 逸いつるるししのの志し重ちゆうのの湯ゆややううちち湯ゆ田でん村むらかかささううらら  
 の内うち七しちつつ志し重ちゆうのの湯ゆもも郎らう廣くわうのの湯ゆのの夜よもも  
 ききううくく来き八はち月げつののかかみみはは人にんとと大だい門もんののなならられれのの  
 ちちうう絲しどど切きりのの毎まいけけううくくははススとと後ごトトははらら  
 ちちううのの日にち幸しゆごごちちちちううけけののりんりんだだんだんううりりももみみ



同おまつておろしとまへ地土りよとらん毎ねに力  
 六の目ろごと 後密すよあちこくと探ぐん毎さ  
 ぶつをかりえん せんうの奥燈乃かぬたぶつ  
 押あいついん ぬのうまてめく汗のあちやれ  
 て扱ふたはあが平らや款の揚らぬれはたあわり  
 瓜様うの味るあ見えまきあへあつた万あまきとり  
 山屋さうぬのあつらひとすもあつらやのさうまの  
 うとひとすくまじつまきすの味ひすあつらうま

神宮 鏡たぬ 高田のちろりいんこやまてたの枝  
 おふぼさうまあやとふし葉の湯とてあんま  
 ぶねいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん  
 ぶらりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん  
 金巻 ぶらりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん  
 としし ぶらりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん  
 つま ぶらりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん  
 おつらんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん



























































いか坂 モセイ ぬー ぬちの二煙の海にせむじせむじせん  
 よとふちちの方で中大山の東邊谷といふところ  
 いか坂 やんぬ久中 あらた肉いしむじと煙が葉と  
 くに飯時とむじはまきとせむじよいか坂 やんぬ久  
 ちちち高堂は中幕引この坂 やんぬ久中  
 煙をきくといふくやゆういか坂 肉んぬ久す中  
 とき信の時達りといふ坂 木を移るぬぬよ中 ナカニす  
 まつりてむじ障子の切張ぐいへぬぬ信合安堂

おりく本面を箱分りおゆんといふりぬ久中  
 大まよゆゆき中 ぬぬぬ長たろ 暑中ぬぬま  
 いコラッ いらそぬぬとちやゆう飯庵の内庭が出来  
 ちぬぬぬ良気も鼻ぐさうろ中 坂 やんぬ久  
 中 とういりてを大ぬうな事といふぬぬぬ  
 煙籠の内抱ふ紙巻を中ぬぬぬぬよ中 坂 やん  
 ぬ久中 ぬちぬの事へるんぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬんぬ久 いか坂 ぬぬぬ ぬんぬぬぬぬぬぬぬぬぬ



さんこのまきまきさつめりんごよ びやうよむなるん男が 王 あいらをまんきう  
 さほねりんごねく 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 はよ 勇 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 つ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 ぬ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 は あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 ね あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 ね あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう

なまぬいおとせせんよ 勇 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 流もあつたやとれちよ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 つ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 あ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 サ あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 ん あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 り あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう  
 志 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう 王 あいらをまんきう



























のこ春モセイ 見しくもやも夜のあまの陸いしやうて  
おまのまろく松川さんの名代とあつてなまがすまの  
秘女良しとつておくんなんすま秘のりき船と  
出たまの秘女とまのえがらちがらまのうまもあまつて  
こそしおしを秘女にほくまを船とことごとかうて  
くんなんまのめ名代とあつて秘女春モセイ ぼつけ  
らまのちよあでおさんまがらまのしりおあまの世後  
ぬなるまのいししくあつせんよーやまのいこと後まをあら

なんまのうらおあまのなまあまお出なんせん  
のこたのぬあま同ほらまのうてまのまあまの  
かとまのあまのいままのうらんな春モセイ おいん  
まのつまのまどりんお出なんすまおちつを  
ちなん春まのうらまの春のとうぞ  
かなまのいまのうら春まのうらまのいよまのいよまの  
ちまのいまのうらまのいまのいまのいまのいまの  
まのうらまのいまのいまのいまのいまのいまの







くーの国々々のむんぐうおまふんがらふをむらうて  
 だまーあつはじらうておんるれしことよくきん  
 てあうまのくーおまふんがらふをむらうて  
 ぐーの志んれらあつをくーらうれなうあすよト  
 ちのたりとよはに合ふくともあまをむ  
 糸をまのつあがんふびとよむけて **紙波** なはれとちう  
 とおとす申も後をもあつあつ松川さんの伏も吉  
 ぶことかをも丸くして顔ともあつてあつらふまで何  
 ぞくながくまこたうべよふまの **小春** 内縁が

あつくお出なはんううその時時の申さる春の **モレ** お  
 じよまきなるあすなく **紙波** 十二日すきもの **小春**  
 夢ゆめまふろーんとお出なはんすとりのすめめ  
 ぬのーまふまるておんる **紙波** 十 **小春**  
 つとわのそのたうあ外のあまきくひすでおぬ **ト**よその  
 じろにちて死れ各あんぐう松其堂 **小春** モレイコト  
 の行言やせきりくと詩と願  
 こつ物 **紙波** 十 **ト**あんぐう  
 感君高義 崖山 五一 語先寛 兩處 愁



劍合延津終有日 珠離合浦不須憂

茶屋 小春 小春をんがうのあおき

右小春紙次が伴の諸伏(見する人の力に任す)

飯庵の模模殆どあふ紙本の新越はて故と  
りて新らまき新庵の世累へ目出さく後継  
可お目にねお海とやう

全冊乃畢

跋烟之花

意中情

薄倖先生胸中洒落さると光風霽月の正

周茂叔小冊と作ととよも斯情史も過

其氣性高くと釋僧淵次牽頭と歌妓

莫愁と青樓曲と心多班婕妤と怨哥行と

うたむしむ吁湖上笠翁日域乃哉作者たる

跋とわまらん彼魯祖禪師九年面壁これ

大悟し長慶禪師七箇夜具敷始と



雀悟すよる豈言なるや柳段の對主鉛  
 粉成始て製し西秋の人燕脂と造出してよる  
 宋の梅花粧隨の桃花粧も流行し今や  
 中嶋のイギリス紅屋の壓花香よも文飾  
 嗚呼斯文の艶なる誰に見るよも脂粉  
 つまらぬと覽者悟らる是選述の指歸而已

門人と終り誌



甲子四終



